安曇野市男女共同参画　2017年4月
5号

湧愛
YOU & I

編集・監修・発行
安曇野市男女共同参画推進会議
安曇野市男女共同参画コミュニケーター
安曇野市
事務局：安曇野市人権男女共同参画課
電 話：(0263) 71－2000㈹
FAX：(0263) 71－5155

H28 安曇野市男女共同参画フォーラム講演会より

「DV」の現状

最近はDV（ドメスティック・バイオレンス）という言葉も珍しくなく、日常生活の中で話題になることも多くなってきましたが、まだまだ分かり合えていないことも多いのではないでしょうか。

昨年6月25日開催の安曇野市男女共同参画フォーラムにおいて、心理カウンセラー 気賀沢葉子さんが、夫婦や交際相手などの間で起こるDVの現状について相談事例を交えて講演されました。

❶ 交際相手からのDVや、わいせつな画像をインターネットに流出させるリベンジポルノなどは、家に居場所がない、両親の暴力をずっと見てきたなどが大きな要因になっている。

その背景のひとつには、「女性としておかしい」「母親として失格」「どうせパート」「女は、どうせなにもできないんだ」「結婚したら、子どもができたら、仕事を辞める」など、文化や社会制度の中でこのように育てられ、扱われてきた歴史がある。

❷ 女性にも、自分のやりたいことがある。能力だってある。女性に関する問題が浮上してきた。いろいろな問題で苦しんだり悩んだりしている女性が安全に、安心して相談できる場所が必要になってきたことが「女性相談室」を立ち上げるきっかけであった。

❸ いろいろな問題の中には、

DV⇒夫婦や恋人などの間で起こる暴力。相手に繰り返し言葉や暴力を使って、自分の思い通りに動かし、支配、コントロールしようとする。

デートDV⇒交際している又は付き合っている若者の間で起こる暴力・監禁・殺人事件など、いきすぎた「嫉妬」「束縛」を愛されていることと誤解する。

リベンジポルノ⇒別れ話を持ち出され、復讐のため、交際していた相手の「わいせつな画像」をインターネット上に流出させる。被害は10代の女子中学生が多い。性産業に絡んでいくことが多い。

講演の中で、相談を受けるときには、「良く来てくれましたね。これまで大変でしたね」と心を込めて熱心に聞き、安心して話ができる雰囲気をつくることが大切であると話されました。

DVは、夫婦間、男女間の問題だけでなく、子どもたちの成長や社会に大きな問題を残します。ひとりひとりが、身近に潜んでいるDVに気づき、お互いに尊重し合い、行動するように心がけたいものだと思います。

～目　次～

1頁　◆H28 安曇野市男女共同参画フォーラムより「DV」の現状
2頁　◆男女共同参画　～中学生の声～
3頁　◆「フードドライブ」知っている？
　　◆地域を照らす
4頁　◆イクボス・温か（あったか）ボス宣言
　　◆男女共同参画カルタ
　　◆つなぐ

男女共同参画　～中学生の声～

これからの社会を明るくするために

穂高西中学校　茂原（しげはら）　和奏（わかな）

私は、中学生議会に参加させていただき「男女共同参画」という言葉を初めて聞きました。男女共同参画の「男女共同」とは、男女の差がなく生活することです。「参画」は「参加」とは違い、色々な催し物に参加するだけでなく、考え、行動し、それに責任を持つことと教えて頂きました。今と昔を比べてみると、男女の区別は少なくなったと思います。だからこそ、この「男女共同参画」について知っている人が少ないということは問題だと思うのです。市では講座を開いているけれど、高齢者の方々がとても多いと聞きました。つまり、若い世代の人がなかなか参加できておらず、私のような中学生などが男女共同参画について話を聞くような機会もありません。もっと若い世代にこの「男女共同参画」について知ってもらうことができれば、家庭の中や社会の中で、職場の中で、男女の差がなく活気のあふれる場を、これからを支えていく若者が創り出していくきっかけになると思います。

そこで、私は中学生や若者に男女共同参画について考える機会を作っていただけるように中学生議会で提案しました。例えば、夏休み前に中学校へ男女共同参画についての作文コンクールの募集をしたり、中学校で出張講座を開いたりしてみてはどうでしょうか。

このような取り組みによって、若いうちから男女共同について関心を持つ人が出てくると思います。そういった人が市の講座に参加するようになれば、これからを支えていく若者と高齢者とのコミュニケーションの場も増えるのではないでしょうか。

私は、もっと多くの人に「男女共同参画」について知ってもらい、これからの社会を支えていけたら良いと思います。

「男女共同参画」を広げるために

明科中学校　矢島（やじま）　芽唯奈（めいな）

私は、中学生議会の「まちづくりグループ」を通して男女共同参画について学びました。

私が思う、「男女共同参画」に対する課題は、現在、男女共同参画の趣旨や内容を知らない人がたくさんいることだと思います。実際に私も「男女共同参画」という言葉を聞いたとき、それはどのようなものなのか、よく分かりませんでした。このような人は、少なくはないと思います。そのため、市では、「男女共同参画」を、地域の方々に知ってもらうために、年に１回ずつ講座やイベントを行っていますが、私は、その回数が少し少ないのではと考えます。講座やイベントの回数をもう少し増やせば、「男女共同参画」を学べる機会が増え、「男女共同参画」を知る人が増えると思います。

「男女共同参画」を広げていくために、私ができることは、男女共同参画に関係した、興味を持ってもらえるようなポスターをかき、人がよく通る場所や、よく目につく場所に貼ることだと考えます。

また、その実現のため、市ができることは、ひと目で男女共同参画を知ることができる趣旨や内容、講座やイベントのお誘いなどを書いたチラシを作成し、回覧板と一緒に、年に３・４回配ることだと考えます。

これらを行うことで、「男女共同参画」に興味を持ち、趣旨や内容を知る人が増えて、「男女共同参画」を広げていくことができると思います。そして、男女平等の意識も強まり、お互いを思いやる、穏やかな安曇野になると思います。

「フードドライブ」知っている？

安曇野フードドライブ実行委員会　桜井洋子

以前から私は、過剰な「食品ロス」について関心を持っていました。日本における食品ロスは、平成２７年度農林水産省のデーターによれば年間６４２万トンとされ、この量は世界全体の食糧援助量の４００万トンよりも多いのです。印字ミス、多めの在庫等、食品メーカーから出るロスは３３１万トン、作り過ぎた料理、冷蔵庫に入れたままの期限切れ食品等、家庭から出るロスは３１２万トンということです。

このようにまだ食べられるにも関わらず、捨てられている食料を有効に活用するために考えられた仕組みが「フードバンク」であり、「フードドライブ」なのです。フードバンクとは、企業や個人から寄贈された食品を生活困窮者や福祉施設などに無償で提供する取り組みのことで２０１５年４月に「生活困窮者自立支援法」が施行されたことにより人々の関心が高まったことが背景にあります。フードドライブとは、生活困窮者支援のため収集所を設置し、家庭で余っている食品を持ち寄っていただくボランティア活動のことです。

飽食といわれる現在にあって、一方で食べることに困難を抱えているという現実を知り、有志６名で平成２８年１０月「安曇野フードドライブ実行委員会」（共催：安曇野市）を立ち上げました。提供していただける食品は、賞味期限が１ヶ月以上のものに限り、缶詰、インスタント食品、パスタ等の乾物、菓子、米（古米）などで昨年１２月１７，１８日の２日間市役所ロビーで初の取り組みとして実施しました。市民から寄せられた真心の品、米７０３キロ、寄贈品１，５９９点、全重量９５８キロは翌日長野市のフードバンクへ運び届けました。

現在私は「不用食器リサイクル」の活動もしていますが、食器も食品も同じリサイクルで回っています。不用な食器を出し、それを欲しい人が無償で持ち帰ることで埋め立てゴミの削減となり、同じように不要な食品を出し、それを必要とする人に無償で届けることで食品ロスの削減へつながるという、まさに循環型社会の形成であり、困った時はお互い様の社会づくりでもあり、市民と行政で織りなす「協働のまちづくり」の一環になっています。今後も地域の仕組みとして定着させていきたいと考えています。

地域を照らす

三郷マレットゴルフ協会
副会長　藤澤可つ子さん

女性も地域や様々な団体活動のリーダーとして、企画・運営・推進的な役割を担ってほしいとの気運が高まっています。しかし、女性の中には、「私などが・・・」「誰かに何か言われそう・・・」「出しゃばらない方がいい」というように一歩踏み出せないことが多いようです。

三郷マレットゴルフ協会から副会長を依頼され、現在その任に就いている藤澤さんにその思いをお聞きしました。

会長高山喬樹さんから依頼があったとき、「マレットゴルフの経験豊富な年配の方々がいらっしゃるのに」また「今まで男性がやっていた役割なのに」と思い悩んでいたら、夫の「依頼されたからには受けたら」の一言があり、引き受けることになったそうです。当初は、副会長の仕事を果たせるか不安もあったようですが、多くの皆さんのご協力、ご支援があり、現在に至っているようです。

主たる仕事は、「会計、月計画の板書ですが、黒沢マレットゴルフ場に集うみんなが楽しくプレーできるよう、女性ならではの配慮もしつつ精一杯仕事をしたい」と明るく語ってくださいました。

～月歴黒板への記入を終えて～
藤澤可つ子さん

（聞き書き：編集委員）

安曇野市職員
イクボス・温かボス（あったかボス）宣言

私は、安曇野市職員の子育てや介護等の家庭生活と仕事の両立、また、地域参画を応援し、すべての職員が意欲と能力を十分に発揮して活躍できる職場づくりを進めながら、市民に信頼され、期待に応えられる市政を実現し、自らも仕事と私生活と地域づくりを楽しむ「イクボス・温かボス」になることを宣言します。

- ○　子育てや介護、自らの健康問題など職員の実情を考慮して、事務分担の見直しや業務の割振り等を行うように取り組みます。
- ○　育児・介護・看護休暇の制度を理解し、職場内で制度の共有を図るとともに、仕事と生活の調和のとれた働き方ができる環境づくりに取り組みます。
- ○　長時間労働に対する職員の意識改革を図り、時間外勤務時間の縮減や健康と生活に配慮した労働時間の設定を行います。
- ○　職場内の連携を深め、年次有給休暇等の休暇が取得しやすい職場づくりを行います。
- ○　毎週水曜日の定期退庁日には、職場内で周知徹底を図るとともに、勤務時間内に業務が終了できるように働きかけます。
- ○　男性職員も女性職員も、育児をしながら働けるよう、制度について職場内で周知徹底し、利用促進を図ります。

平成29年1月1日

職　名　安曇野市長

氏　名　宮澤宗弘

安曇野市役所からお知らせ

2017年1月1日、安曇野市役所では職員のワーク・ライフ・バランスの実現に向けて、市長はじめ管理職員77名が、

「イクボス・温かボス宣言」を行いました。

少子化で労働力が減りつつある中、子育て世代の出産育児時の離職や介護での離職をいかに防ぐかは、企業等の喫緊の課題です。

今後、市では市内の企業や団体にこの宣言を広げることに取り組んでいきます。

※左は市長の宣言書の写しです

イクボス・温かボス宣言

最近、新聞等でこの言葉をよく目にするようになりましたが、「イクボス」とは職場において部下の仕事や育児、介護との両立に理解を示し積極的に支援する企業や行政等の組織のリーダーを言います。

また、そのことを宣言することで、個人も組織も幸せな環境を創ることを「イクボス宣言」と言い、長野県では「イクボス・温かボス宣言」として広く取り組みを呼び掛けています。

今まで妊娠・出産・育児に伴う休暇は女性が取得するのが当たり前、男性が育休を取得するというと「男が育児なんて・・」という目で見られがちでした。

しかし、女性だけでなく男性も育児に関わることで育児の大変さや楽しさを知ることができ、女性が育児のためにキャリアを諦めなくてはならない状況を防ぐことができます。上司のイクボス宣言により子育てや介護などの休暇を取りやすい環境が創られます。

今やこの宣言は国の省庁や地方自治体、一般企業へと広がり、長野県内でも１，５００人を超える人が宣言をしています。少子高齢化により労働人口が減少していく中、従来の働き方を見直す意味でも「イクボス宣言」は社会の流れとなりつつあります。（編集室）

安曇野市男女共同参画カルタ

い　育児も　介護も　男性参加

せ　背中見て子どもは育つ　しっかり見せよう　親の生き方

ほ　暴力は　決して許すな　言葉でも